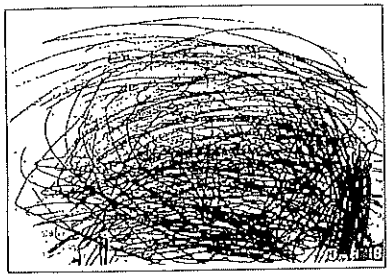
1　今日をめいっぱい生きる
――生活の主体者を育てる

「ついてまわり」のまり子

重複学級三人（小一）の担任になった私は、入学式当日、おどおどしているまり子のことが妙に気になった。まり子はいつも同じクラスの俊男の服のそでをそっとつまみ、すがるようにして、文字どおり「ついてまわって」いた。俊男が男子トイレに行けば、そこにもついて行く、というぐあいであった。まり子が時折見せる上目づかいは、この子の自信のなさを示していた。

重複学級が合同でやる朝の会の「まねっこあそび」では、まり子は、他の子たちが床に



絵1
形にならなかった
まりこの絵

寝そべってもまねをせず、一人突っ立っていた。

「突っ立ち」は、四月、五月と続いた。

私は、突っ立っているまり子に「寝ろ！」とは求めなかった。それは、まり子がなぜ突っ立っているかについて、当初から、私なりのとらえ方があったからだ。

まり子は「他の子がすでに寝そべっているから、寝れないのではないか」と私は見ていた。自分の思いの弱いまり子は、他の子からワンテンポ遅れることによって気後れを感じ、いっそう身動きがとれなくなってしまうのではないか。

まり子は、まわりがすでに横になってしまっていて、自分だけ遅れているというギャップに気づけば気づくほど、その溝を越えるのではなく、逆に身を引いて突っ立ってしまっている、と見たのだ。

自分の気持ちを出しきれないまり子の弱さは、いたるところであらわれていた。

五月のはじめ、校内の「絵の会」があった。

まり子は絵が描けなかった。形を描く力はありつつも、ぬりつぶしてしまって形にならないのだ（絵1）。だがそれは、ある意味では当然であった。自分の気持ちをあらわす力の弱いまり子にとって、思いを表現する活動そのものである絵は、むずかしかったにちがいない。

まり子の課題は明白であった。何よりも自分なりの思いを強めることであった。

「安心感」を基礎に

まり子はあいかわらず、俊男の後ろにくっついていた。だがしばらくするうちに、まり子が俊男から離れているときがあることに気づいた。それは、うんていなど、外の遊具であそんでいるときと、給食の食缶を返しに行くときであった。

私にはすぐ納得できた。遊具であそぶことは、幼稚部を経験しているまり子にはよくわかることだし、しかも楽しい活動であった。また、食缶返しもやるべきことがはっきりしていることがらであった。

この子もまた、楽しいことや見通しのもてることであれば、主体的な行動がとれる、私はそう確信した。

六月のある朝。いつものように合同朝の会を重複学級でやったあと、ひと休みしていたら、だれかがテレビのスイッチを入れた。幼児番組の体操の場面が出てきた。

そのとき、「ぞうさんのあくび、あーあ」という歌に合わせて、椅子に座って見ていた

まり子が、手を動かしはじめた。あの、いつも突っ立っているまり子が、である。私ははじめ、まり子はこの番組に慣れ親しんでいるからまねをするのかな、とも思って見ていた。だが、慣れているか否かでいえば、毎朝やっている朝の会の「まねっこ」だって……

その時私は、ふと、先日絵本を見せたときのまり子の思いがけない反応を思い出した。絵本を見せたとき、まり子はいつになくさかんに声を出して話しかけてきた。

「はな……、おうち……」

彼女はこれまで、私が話しかけても、あまりものを言ってはくれなかった。その彼女が、である。

私はこう思った。

私がまり子に話しかけるときのように、人間と人間が直接的に関係を結ぼうとすると、人とかかわる力の弱い彼女はたじろいでしまい、ものが言えなくなってしまう。だが、テレビや絵本を中にはさんでの間接的なかかわりでは、今、何が話題になっているかがはっきりとわかる。しかも生身の人間がストレートにかかわってくるわけではないから、安心して反応を示すことができる。

もしそうであれば、私は何よりもまり子を受け入れ、まり子との間に安心感を育てようと思った。共感的・応答的な人間関係こそが、人間の能動性を引き出すからだ。また、

「わかること」を大事にしようとも思った。「わかること」は、見通しをもって主体的に動くための基本であるからだ。

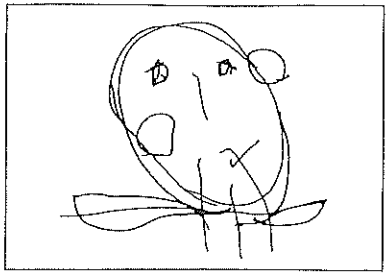
「集団」と「文化」との出会いのなかで

七月のはじめのことであった。体育の時間、まり子は「普通学級」（聴覚障害だけをもつ子どもたちのクラス）の子といっしょにプールの水の中に入っていた。フォークダンスの曲が流れる。水あそび代わりの水中での踊りがはじまる。みんなはワーワー言いながら水しぶきをあげ、体を左右にひねって手をたたく。

すると、まり子の手が動く。体も少しひねっている。あのまり子が、体を動かしている……。私は胸の高まりをおぼえながら、まり子の動きを見ていた。やや遅れぎみではあるが、まちがいなく、フォークダンスの動きだ。

他のみんなの楽しそうな雰囲気と、大好きな水あそびができる、という喜びで、まり子は、「思わず」体を動かしてしまったのだろう。

「仲間（集団）」と「楽しい活動（文化）」がまり子を変える――そう思わずにはおれなかった。



絵2
自分を描いた1

まり子は、人との関係でも少しずつ変化を見せていった。

重複学級の合同朝の会では「ハンカチ落とし」をやっていた。まり子はずっと、俊男にしか落とさなかった。いや、落とすのではなく、後ろに、「そっと置く」だけであった。

ところが、六月のある日、まり子は圭二の後ろにそっと置いた。圭二は、おむつをした障害の重い子であった。私には、まり子の心の中の揺れまでが見えるようであった。圭二なら、後ろから追いかけられる心配もない……。そのうち、健太や守にも置きはじめた。この子らも遅れがあり、何か働きかけていっても、急に反撃されるようなことはなかった。

まり子は、幼稚部の頃、聴覚障害だけの子らといっしょにいた。その集団の中では、まり子はつねに「世話をされる立場」になりがちであった。そしていつも、背のびをし、他の子の動きについていくのがせいいっぱいだったのだろう。自分の思いをふくらませることもなしに……。当時笑顔がなかった、という。

そのまり子もようやく、能動的に働きかけるようになってきた。

九月。絵の中にとうとう、自分が出てきた（絵2）。

能動性は、ことば獲得の面にもあらわれてきた。

少ないことばを駆使する

まり子は、私と介護員さんの体をさわって、「大きい、大きい」と言い、その後、自分の体や俊男の体をさわって、「小さい、小さい」と言う。

そんなことを一日に何回となくやる。

私は、そうしたまり子のことばの使い方がうれしかった。たしかにまり子は、前から「大きい、小さい」ということばは知っていたかもしれない。だが知っているということと、それを使って現実の世界で生きることとは、別のことなのだ。「大きい、小さい」という認識のワクで見たとき、私や介護員さんは「大きく」、自分や俊男は「小さく」見えてきたのだろう。それらの一つひとつが、まり子にとっては新たな発見だったにちがいない。だからこそ、飽きることもなく、自分のまわりの人に次つぎとあてはめてみていたのだ。

だが、この「大きい、小さい」というワクぐみは、どこにでも通用するわけではなかった。私や介護員さんには「大きい、大きい」と言いつつも、音楽の先生のときには困った顔をするようになった。音楽の先生は、細身で、背の高い人であった。私は、このとまどいこそ貴重に思えた。「太い、細い」とか「高い、低い」という新しい概念で世の中を見

ていく出発点になる、と思うからだった。

それからまたしばらく後のことである。

まり子は私の腹をさわり、例によって「大きい、大きい」と言ったあと、ついでに俊男のおなかをさわった。一瞬、（あれっ）という顔をしたあと、「大きい、大きい」と言った。これまで、俊男の体をさわったあとは決まって「小さい」と言ったのに。やや太りぎみの、ぽちゃっとした俊男のおなかの感触はまさしく、腹の出ている私の感触と同じ、と思ったら、とたんに「大きい、大きい」と声が出てしまったにちがいない。おなか、という尺度でみたら、二人とも「大きい」と見えてきたのだ。

まり子は、もう一人の級友伸一との間でも、「大きい」をたくみに使った。

自閉的傾向をあわせもつ伸一が、ボーリングあそびをしているときであった。彼の転がしたボールが、珍しくすべてのピンを倒した。喜んだ伸一が何を思ったか、近くにいたまり子の首っ玉にしがみつく。突然のことにまり子は抱きつかれたまま、オロオロとする。伸一がまり子に抱きつくことなどこれまでになかったからだ。しばらくなされるがままになっていたまり子が、伸一の顔をのぞき込みながら「赤ちゃん、赤ちゃん」と言いだす。そして自分を指さして、「大きい、大きい」と言う。

私は思わず声をあげて笑った。こんなふうに抱きつくのは赤ちゃんで、抱いている私は

お母さん。だから大きい――というまり子の論理がおもしろかったからだ。

それにしても、まり子の「大きい、小さい」は、私に多くのことを教えてくれた。まり子の「大きい、小さい」は人間がことばを獲得していく過程そのもののように思えた。

ともすると私たちは、できるだけ多くのことばを教えようと考えがちだ。だが、語彙の多さのみが問題なのではない。語彙は少なかろうとも、それを使って、どう生活を主体的に切り拓いていくかこそが大事なのだ。

「少ないことばでめいっぱい生きる」まり子の姿が私にそう教えてくれた。

ユーモアは生活の幅の証

小学部二年生になったまり子は、会話を楽しむようになってきた。

ある日、伸一が休んだ。給食のとき、伸一の分の牛乳を私が飲んだ。するとまり子が、指で鬼のかっこうをしたあと、私に親指を突き出し、「メーッ」と言う。二本も飲んでいかん、という意味だ。私が知らん顔をして飲みつづけると、まり子は入口の方をむいて手招きをする。そのうち、口元に手をあてて「オーイ、オーイ」と声を出して呼ぶ。伸一に言いつけてやるぞ、オーイ、伸一来い、来い、という意味だ。むろん伸一が家で休んでいることを知りながら呼んでいるのだ。

まり子が私と会話を楽しんでいる。生活の幅を示す、ユーモアさえ解しながら。

私は、このようすをまり子の母親にも見せてやりたいと思った。以前、まり子の母親が私に話してくれた。

「この子はお医者さんに、九八パーセント生きられない、と言われたんです。八〇〇グラムでした」

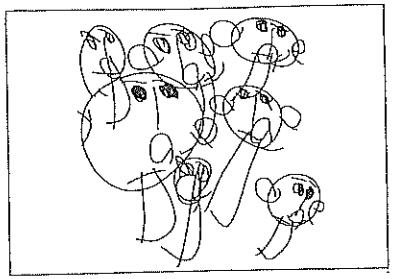
八〇〇グラムだった子が、今めいっぱい命を輝かせている――よくぞここまでに成長した、と思うと、私は胸がいっぱいになるのだ。まり子、見事だ。人間てすごいなあ。私は心底そう思うのだった。

絵になならなかった去年の「絵の会」。ちょうど一年後の今年の「絵の会」で、まり子は絵を描いた（絵3）。

自分をつき出し、仲間とともに生きる、今のまり子を象徴する絵だ。

まり子は仲間や文化と出会うなかで、生活の主体者として育っていった。

だが、子どもの発達はいつも順調に進むとはかぎらない。「動作の遅い」とし子には私もさんざん手こずるのだった。



絵3
絵の中に
仲間が出てきた！